

平成20年5月の解説（週間天気予報）

【5月の天候状況】

上旬は低気圧が日本付近を数日の周期で通過し、全国的に天気は周期的に変化しました。中旬は旬末に台風第4号を含む深い気圧の谷が通過し東日本の太平洋側では大雨となりました。下旬は低気圧の影響で全国的に曇りや雨の日が多く、東・西日本ではところどころ大雨となりました。

月を通しての日照時間は、北日本と東日本の太平洋側では少なくなりました。降水量は東日本の太平洋側でかなり多く、西日本の太平洋側は多くなりました。月平均気温は東日本と西日本では高くなりました。

【5月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年（注）より2ポイント高く71%でした。例年と比べて四国地方では8ポイント低くなりましたが、北海道、関東甲信、北陸、九州南部南部では5から7ポイント高くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全国平均では例年より0.4 小さい 2.5 で、例年と比べて北日本と北陸、近畿、中国、九州南部地方では0.5 から 1.1 小さくなりました。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全国平均では例年より0.2 小さい 1.8 で、東海、北陸、近畿地方では0.4 小さくなりました。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【5月の週間天気予報から】

5月2日から3日は、本州南岸を低気圧や前線が通過したため、関東地方は東海上からの湿った空気が入り、雲が広がって広い範囲で雨の降る天気となりました。5月2日21時の地上天気図を図1に、同日の日降水量の分布を図2に示します。

4月28日に発表した週間天気予報では、東京地方の5月2日、3日の予報は、ともに「曇り時々晴れ」（降水確率20%）としました。このときの予報では、南海上の低気圧は本州からは遠く、関東地方はむしろ日本の東から伸びる高圧帯の勢力圏内で、雲は多いながら晴れ間のある天気と判断しました（図3）。その後の予報でもほぼ同じ見方を行い、4月30日発表の予報までは内容を大きくは変えていません。

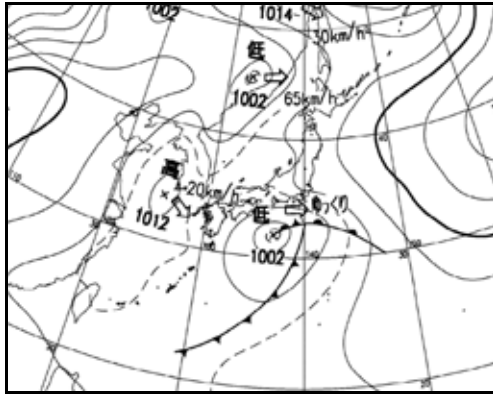


図1 2008年5月2日21時の地上天気図

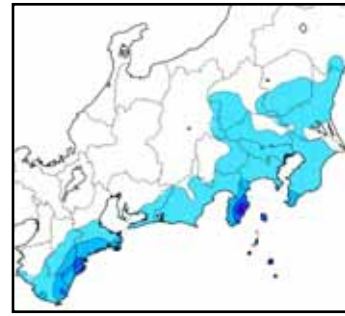


図2 2008年5月2日のアメダス日降水量

実際には、低気圧や前線が本州に近いところを通過したため、関東地方は東海上からの湿った空気が入り、雨が降りました。関東地方以外の本州各地は晴れて気温の上がったところも多くなりましたが、関東地方は天気が崩れた影響で気温もあまり上がりませんでした。

本州南岸を低気圧や前線が通過する場合、直接の影響で天気が崩れることがあるほか、特に関東地方などでは、東からの湿った空気の影響で曇りや雨の天気になることがあります。今回の事例では、

この予想がうまくいかず、ゴールデンウィークにかかる5月2日から3日の関東地方の予報を大きく外す結果となりました。

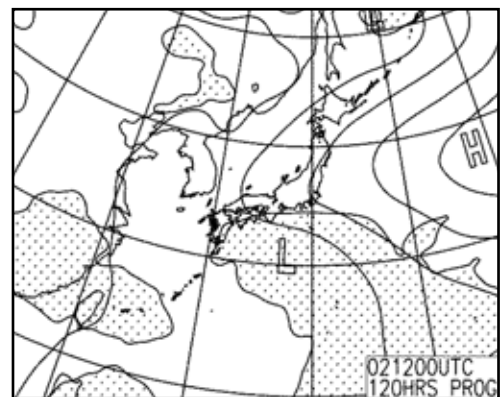


図3 4月28日の予報で使った5月2日21時の地上予想図
(水玉模様は降水が予想される範囲を表す)

【7月の週間天気予報の利用にあたって】

例年、ほとんどの地方で7月の中旬から下旬にかけて梅雨明けした後は晴れて暑い日が多くなりますが、梅雨明けの時期は、地方や年によって大きな違いがあります。早々と7月上旬に梅雨明けする年や、8月になっても夏らしい晴れて暑い日が続かず、梅雨明けを特定できない年もあります。

7月は梅雨が明けるまでは梅雨前線の影響で雨や曇りの日が続きますが、梅雨が明ければ一転して太平洋高気圧に覆われて、晴れて暑い真夏の日が続きます。梅雨前線や太平洋高気圧の動向は地方や年によって大きく違いますので、レジャーの計画や健康管理などには週間天気予報を有効に利用して下さい。